

実際に、しかも露骨に存在することを端的に示している。もちろん、ファストファッションの特徴であるSPA形式も、アジア地域で低賃金の労働者を確保できるからこそ成立するという点では、当然、ヒエラルキーの中に組み込まれている。こうして本書を振り返ってみると、現実生きる人々は、ヒエラルキーとか権力とかに疲れて新しい生き方を模索しているように見えるのに、ファッションをリードするところでは旧態依然としたシステムが強固に存在しているように見える。「自分が好きなものを」とか「自分らしく」とかいう理念と、すべての価値が、場所で決まるファッション「界」の実態の乖離に愕然とする。これは今後、どう変化していくのだろうか。また、本書が出版されてから3年と少し経つ。その間に多くの人々が利用するようになった新しいSNSは、ファッションと密接につながり、影響力を持つにいたっている。この先、こうした新しいメディアについての検討が、本書のような良質なファッションの学術書の上にもどう展開されていくのかも、非常に楽しみでならない。

<参考文献>

ダグラス、メアリ 2009『汚穢と禁忌』塚本利明訳、筑摩書房。

鳥丸知子著

『ミャオ族の民族衣装 刺繍と装飾の技法——中国貴州省の少数民族に伝わる文様、色彩、デザインのすべて』

誠文堂新光社、2017年刊
239頁、3600円＋税

国際ファッション専門職大学
丹羽朋子

中国の西南部は、今も華やかな民族衣装を

着る「少数民族」(漢族以外の民族)が多く住まう地域である。そのなかでもミャオ族の民族衣装は、近年ドリス・ヴァン・ノッテンのコレクションのモチーフとされるなど、その精美な刺繍や染織が現代のファッション・デザインを触発する存在としても知られる。本書はおもに貴州省のミャオ族が自らの手で自身や家族の服を「作る」実践、そのために蓄積された多様な染織技法について、豊富な図版資料を用いて紹介した著作である。著者の鳥丸知子は国内外で制作指導も行う染織技術の専門家であり、1995年から現在までの長きにわたり、中国各地の民間に伝わる織物や服飾制作の現場を訪ね歩き、失われつつある手仕事の記録を重ねてきた。本書はその膨大な記録データや知見をとりまとめた労作 *One Needle, One Thread: Miao (Hmong) Embroidery and Fabric Piecework from Guizhou, China* (University of Hawaii Art Gallery, 2008) の邦訳版である。

本書は大きく5つのパートと巻末付録から成る。冒頭でミャオ族や貴州省についての略説と、著者が足を運んだ175箇所もの「調査訪問地」の位置を記した地図が示された後(本書、10-12ページ)、第1部「民族衣装・百花繚乱」(15-52ページ)では同地のミャオ族が用いる多様な服飾品とその着用姿を写した大判写真が、製作地の名を付して列挙される。第2部「技と技をつなぐもの」(53-72ページ)では、布地や糸作りなどの服飾製作を下支えするものづくりの現場が描かれる。中心的パートである第3部「ステッチの種類」(73-110ページ)および第4部「布ワーク」(111-146ページ)は、109におよぶ刺繍技法と、その他のパッチワークや布ボタン等の仔細な製作手順が解説される。第5部「手仕事とともにある暮らし」(147-214ページ)では、「今なお神話の世界に生きるミャオ族の村に滞在し、人々と日常を共にして体験した物作りの記録」として、さまざまな染織品の製作経験が綴られる。巻末付録(215-238

ページ)としては、魔除けや吉祥の意味を持つ多様な文様のリストや採録されたステッチのインデックス等が挿入される。

本書の最大の特長は、調査者が現地の作り手とともに自らも手を動かして複雑な技法を記録し、作業工程を描いたイラストや刺繍の「刺し方図」と写真図版等を巧みに組み合わせながら、遠い場所の読者にもわかりやすく提示するその手法にある。「まえがき」(3ページ)では原書である英語版が、これらの「手仕事のすべてを、ミャオ族の次の世代が継承していくことを願って」作られたと記されているが、この言を体現するように、本書では他者の手による再現を可能とするような徹底した図示が試みられている。たとえば、ミャオ族の民族衣装に特徴的な立体的な刺繍文様の素材となる組紐制作については、道具や制作風景の写真に加えて、手作りの組紐のサイズと仕組みを示したイラスト、糸巻きに使われる重しの各種材料の比較写真、組紐を縫い付けた衣装部分の表面と裏面の拡大写真、基本的な組み方の手順を示した組み写真による解説、さらに応用的な組み方の糸の配列図までもが配される(62-65ページ)。加えて、刺繍の下絵や裁縫箱、布や糸に光沢を与えて手触りをよくするため用いられる糊作りなどの関連技術までもが丁寧に紹介され(66-71ページ)、後者の糊に至っては、植物素材の採集から制作、使用までの詳細な過程が、各作業風景の写真入りで解説されている。

また、「複雑な手仕事の中にある智慧や心情を理解し」、「ミャオ族の精神性の高い民族衣装」を読み解く(3ページ)という筆者の指針に添うように、完成した染織品についても、成人女性の衣装に加えて、子の健やかな成長を祈念する護符的な文様や形態をもった「おぶい帯」や幼児の帽子、また民族の始祖伝説や吉祥図案を施した布を用いた前掛けや狩猟用の袋などが多く取り上げられていることも、本書の特色だと言える。

最後に、本書が詳細な記録データを提示す

る優れた研究書であるからこそ、補足されるとよいと評者が考えた2つの点について述べたい。1つ目は、作り手や着用者の内在的視点からの記述である。本書では外部者的な観点から、「ミャオ族」が包括的な集団区分として扱われているような印象を受ける。だが宮脇[2017]によれば、「ミャオ族」とは1949年の新中国成立後に国家による「民族識別工作」で定められた、中国国内に居住する総人口940万を超える人々の総称(大多数を占める漢族からの他称)であり、実際には3つの自称集団(湖南省西部から貴州省東部に住む「コー・ション」、貴州省全体に住む「ムー」、貴州省西部から雲南省・四川省に住む「モン」)に大別され、それぞれの集団内ではさらに複数に分かれたサブ・グループ間で相互の差異が認識されているという。本書でも各写真図版や解説テキストに具体的な調査地名が付され、また「各地の衣装は、独自の技術や文様により、一見してどこの村のものか識別できる」(15ページ)と記されている。さすれば、現行の記述に加えて、それぞれ異なる自称集団に属し、染織品を作り身につける人々自らの視点から、他との同一化/差異化の論理や、時代を追った衣装の変化への言及があることで、本書の記録により厚みが増すのではないか。

これとも関連して、2点目の要望として、技法を名指すローカルタームの併記がある。たしかに本書では、ミャオ族の複雑な染織、とくに刺繍技法が西洋的な技法の名称を用いて解説されていることが、他国の読者の実用にも資する大きな利点となっている。だがその反面、いかに丁寧に具体的な手の仕事を図示されていても、我々の側の名指し方に置き換えられることで、「装飾としての一般的な刺繍の定義では捉えきれない多くの技」(53ページ)と筆者も賞するその豊穡な技法文化が、ある種の削ぎ落としを余儀なくされる可能性はないだろうか。現地語が併記された紙面は視覚的に煩雑になるという難点はある

が、作り手たちが用いるローカルな名称を保持しながら技法について思考することは、本書の資料的価値を高めるといった観点からも、検討されてよいアプローチではないかと考えた。

以上、本書の構成を概観し、その特筆すべき点および評者からの要望を記したが、言うまでもなく、ある衣装群の製作技法の研究書としての本書が誇る視覚的、経験的な調査データには唯一無二の価値がある。染織文化の研究者や染織の実践者、そして技術継承をめざす次世代のミャオ族それぞれにとって、本書は意義ある書となるにちがいない。

<参考文献>

宮脇千絵 2017『装いの民族誌——中国雲南省モンの「民族衣装」をめぐる実践』風響社。

宮脇千絵著

『装いの民族誌——中国雲南省モンの「民族衣装」をめぐる実践』

風響社、2017年刊
372頁、6000円＋税

国際ファッション専門職大学
丹羽朋子

本書は、中国の少数民族「ミャオ族」のうち「モン」(Hmong)と自称する人々の、「民族衣装」をめぐる実践について、漢籍史料の精読と文化人類学的な実地調査を通じて多角的に考察した民族誌である。「民族衣装」はメディア等でも盛んに使われる語であるが、そもそもある一着の服が「民族衣装」と目される時、それが誰によって眼差され、いかに規定されるのかは、服飾デザインによる「文化の盗用」が厳しい批判に晒される昨今、きわめて重要な論点だと言える。本書はファッションをめぐるこの根源的な問題を考える上で示唆的な良書である。なお、本書につい

てはすでに文化人類学者等による複数の書評が記されている[佐藤2018:中尾2019:田本2019]。本稿ではそれらとは異なる観点から、おもに本書の調査研究の方法論に着目し、幅広いファッション研究にとっての参照点を探ることとしたい。

前掲の書評で紹介した鳥丸の著書[2017]が、貴州省のミャオ族が自らの衣装を手で「作る」場面を描いていたのとは対照的に、本書の著者である宮脇が赴いた雲南省文山州の村々では、2007-09年の調査当時、日常的に着用される「モンの衣装」の多くが化繊布の既製服と化していた。人々は自然素材で手作りされた「伝統的な」民族衣装を躊躇なく手放すばかりか、旧来の染織技術の喪失すら意に介さない。家々の織機も解体され、もはや「染織を行っていない調査地」に入った著者の関心は否応なく、服を「作る」ことよりも「着る」ことへ、人々はなぜ洋装の普及後も「モンの衣装」を着続けるのかという問いへと向かっていく。このような経緯から本書では、衣装自体と着用者たちの生活の変化をめぐる考察を通じて、①歴史や内外から民族衣装に付される「真正性」の形成、②民族衣装の変化を促す「審美性」の問題、③モンの社会生活における「規範性」としての民族衣装の作用という3つの側面が焦点化され、これらの相互作用のなかでモンの「装いの実践」がいかに現れるのかが明らかにされる。

全体の構成は、360枚超もの写真図版が並ぶ「カラー口絵」に始まり、序章、モンの概要や歴史に関する考察(第1・2章)、モン衣装の生産・流通・所有/使用の各局面の民族誌的記述(第3-6章)を経て、終章の総括に結ばれる。以下、各章の議論を概観した後、評者による注目点を述べたい。

序章(本書、15-41ページ)では、「ローカルな伝統染織や衣服の変化」および「民族衣装」に関する文化人類学他諸分野の先行研究が横断的に取り上げられ、その問題点が検